

アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を 通して見る人種意識

——W・E・Bデュボイスからポスト・ソウル世代の
コルソン・ホワイトヘッドにいたるまで——

森 あおい

(実施要綱)

2011年10月15日に開催された公開セミナーにおいて、「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識—W. E. B デュボイスからポスト・ソウル世代のコルソン・ホワイトヘッドにいたるまで—」という演題で講演を行なった。講演は2時間という限られた時間ではあったが、奴隷制の時代からオバマ大統領誕生にいたるポストレイシャルの時代までのアフリカ系アメリカ人の歴史の概要を、音楽と照らし合わせて解説した。聴衆の方々に本講演のテーマを視覚・聴覚を通して感じていただくために、パワーポイント、音楽、映像を用いて資料を提示した。聴衆の方々が、熱心にノートを取りながら講義を聞いてくださる姿が、大変印象的であった。また、今回の公開セミナーには卒業生も駆けつけてくれて、再会の良いチャンスとなった。今後は、卒業生にも公開講座の広報を積極的に行なってはどうかと考える。

会場の設備に関しては、公開セミナーに関するアンケートの結果からもわかるように、改善の余地があると思われる。特に、オーディオ機器に関しては、前日にリハーサルを行い、業者の方にも確認していただいたにも拘わらず、うまく作動しないものがあったことは、残念であった。

本講演は、2011年6月に山口大学で開催された 中四国アメリカ文学会支部第40回大会でのシンポジウム「アメリカ文学と音楽」にて発題した、「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—ポスト・ソウル世

代の作家、コルソン・ホワイトヘッドの『サグ・ハーバー』を中心に」の内容を元に行なったものである。その内容は、科学研究費補助金（平成21－23年度 基盤研究C 研究課題名「アメリカ格差社会とアフリカ系アメリカ人のサブカルチャー」）による研究成果に基づいている。今回のセミナーを通して地域社会を中心とした一般の方々に科研費による研究の成果を知っていただく機会となった。

なお、今回の公開セミナーで行なった講演の一部は、2011年度広島女学院大学学術図書出版助成を受けて出版される『言葉が語るもの—文学と言語学の試み』（英宝社 2012年2月刊行予定）に収録される「アフリカ系アメリカ人の音楽・文学に見る人種意識の変遷—奴隷制からポスト・ソウル時代にいたるまで—」というタイトルの論文に含まれる予定である。

最後になったが、公開セミナーの実施にあたっては、資料の準備、当日の進行等を担当して下さった総合研究所の方々、また、当日の講師紹介、質疑応答の司会を引き受けて下さった英米言語文化学科主任、そして、ご関係の皆様方に感謝申し上げます。

(テキスト)

アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を を通して見る人種意識

——W・E・Bデュボイスからポスト・ソウル世代の
コルソン・ホワイトヘッドにいたるまで——

I. アフリカ系アメリカ人の歴史と音楽

奴隷制時代、文字の習得を禁じられた中で生まれた音楽

- 1 労働歌
- 2 黒人霊歌 (Spirituals)

II. 南北戦争後の音楽

1. W. E. B. デュボイスの「哀しみの歌」(『黒人の魂』)と黒人霊歌
2. W. E. B. デュボイス経歴 (1868-1963) マサチューセッツ州グレートバ
リントン生まれ。米国の教育者・著述家・黒人運動指導者；NAACP
(全米黒人地位向上協会)を創立。1963年に米国籍を放棄し、ガーナに
帰化するが、直後に死去した。

(引用1)

この身体を横たえるためわたしは墓地をとおって歩いてゆく
わたしは月の出を知っている
わたしは星の出を知っている
わたしは月の光のなかを歩いてゆく
わたしは星の光のなかを歩いてゆく
わたしは墓のなかに横たわりぐっと両腕を伸すだろう
わたしは日の暮れるそのころには
神の審判をうけに行くだろう
そしてこの身体を横たえるその日には

わたしの魂とおまえの魂はひとつの場所に相会うだろう。

—黒人の歌

暗闇のなかを歩いた彼らはおおくの歌——《哀しみの歌》——をその昔の日々にうたった。なぜとって彼らは心の底から疲れきっていたのだから。それゆえわたしはこの本のなかに書いたひとつひとつの思索のまえに、黒人奴隷の魂が歌となって人々に語りかけたあの怪しいふるい歌のたえずつきまどってくるようなひびきを、その一節をおいてきたのである。子どものころから、これらの歌は、わたしを奇妙に刺激してきたものである。それらの歌はひとつまたひとつと南部からわたしにそれとははっきり知られることもなくやってきた。しかも、ただちにわたしは、それらをわたしについて歌っているもの、わたし自身のものとして理解したのである。それからさらにのちになって、わたしがナッシュビル（テネシー州の首都）にやってきたとき、青ざめた市のうえに、塔のようにそびえるこれらの歌によってできあがっている大寺院をみたのである。わたしには、ジュービリー・ホールはそのむかしに歌だけで造りあげられたように、そしてその煉瓦は苦役による血と屍で赤くなっているように、思えた。そこから、わたしに向けて朝、昼、晩と、わたしの兄弟や姉妹の声にあふれ、過去の声にみちた、おどろくべきメロディーの流れがほとぼしりはじめたのである。（デュボイス 344-45）

I walk through the churchyard
To lay this body down;
I know moon-rise, I know star-rise;
I walk in the moonlight, I walk in the starlight;
I'll lie in the grave and stretch out my arms,
I'll go to judgment in the evening of the day,
And my soul and thy soul shall meet that day,
When I lay this body down.

NEGRO SONG.

THEY that walked in darkness sang songs in the olden days —Sorrow Songs— for they were weary at heart. And so before each thought that I have written in this book I have set a phrase, a haunting echo of these weird old songs in which the soul of the black slave spoke to men. Ever since I was a child these songs

森 あおい：アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

have stirred me strangely. They came out of the South unknown to me, one by one, and yet at once I knew them as of me and of mine. Then in after years when I came to Nashville I saw the great temple builded of these songs towering over the pale city. To me Jubilee Hall seemed ever made of the songs themselves, and its bricks were red with the blood and dust of toil. Out of them rose for me morning, noon, and night, bursts of wonderful melody, full of the voices of my brothers and sisters, full of the voices of the past. (Du Bois 177-78)

3. フィスク大学ジュービリー・シンガーズ

- (a) フィスク大学：1866年に解放奴隷のために設立された歴史的黒人大学の一つ。
- (b) ジュービリー・シンガーズ：オハイオ州出身の奴隷解放論者で、同大学の経理を担当し、学生に音楽を教えていたジョージ・L・ホワイトによって結成された学生合唱団。
- (c) フィスク大学の経済的危機を救うために1871年10月～72年5月にかけて北部での演奏旅行を行なう。ホワイト・ハウスでも演奏。
- (d) 成功のきっかけ：(1) 黒人霊歌 (2) ヘンリー・ウォード・ビーチャーやマーク・トウェインの支持。
- (e) 後にヨーロッパ演奏旅行（1873）、アジアの演奏旅行（1903）などを行い、成功を収める。

4. ブルースの伝統

(引用2)

白人の宗教は、霊的な力を持つ音楽を教会に限定し、この世的な音楽を危険で、場合によっては罪深いものとみなした。そしてアフリカに起源を持つこの世的な音楽の霊的な力は、悪魔の力として非難された。(Marvin 412)

Since the white man's religion confined the spiritual power of music to the churches and regarded secular music as dangerous and often sinful, the spiri-

tual power of African-derived secular music was condemned as the work of the devil. (Marvin 412)

5. 「レースミュージック」(race music) からリズム・アンド・ブルース (R & B)、ソウルミュージックへ

(a) リズム・アンド・ブルース (R & B) : レースミュージックに代わる呼称として1947年から用いられるようになる。

(b) ソウルミュージックと公民権運動

(1) アレサ・フランクリンの「レスペクト」(“Respect”)

(2) サム・クックの「変化が訪れる」(“A Change is Gonna Come”)

(3) バラク・オバマの「勝利演説」(“A Victory Speech”)

(引用3)

僕は川べりの小さなテントで生まれた

あーそれからずっと僕は川のように流れている

ここまで来るのに長い長い時間がかかった

でも僕は変化が来ると知っている、あーそうだ、やって来る

生きるとはとても大変だった、でも死ぬのも恐ろしい

だって、空の向こうに何があるか、わからないから

ここまで来るのに長い、長い時間がかかった

でも僕は変化が来ると知っている、あーそうだ、やって来る

映画を観にダウントウンへ出かけた

誰かが、このへんをうろつくな、と言い続ける

ここまで来るのに長い、長い時間がかかった

でも僕は変化が来ると知っている、あーそうだ、やって来る

僕は兄のところへ行って、

助けてほしい、と言ったんだ。

でも彼は僕に活を入れて殴りつけ、

押し戻して跪かせたのさ。

森 あおい：アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

これ以上長くはもたない、と思ったこともあった
でも今ではなんとかやっつけていけそうだと思う
ここまで来るのに長い、長い時間がかかった
でも僕は変化が来ると知っている、あーそうだ、やってくる
(サム・クック 「ア・チェンジ・イズ・ゴナ・カム」)

I was born by the river in a little tent
Oh and just like the river I've been running ever since
It's been a long, a long time coming
But I know a change gonna come, oh yes it will

It's been too hard living but I'm afraid to die
Cause I don't know what's up there beyond the sky
It's been a long, a long time coming
But I know a change gonna come, oh yes it will

I go to the movie and I go downtown
Somebody keep telling me don't hang around
It's been a long, a long time coming
But I know a change gonna come, oh yes it will

Then I go to my brother
I say brother help me please
But he winds up knocking me
Back down on my knees

There been times that I thought I couldn't last for long
But now I think I'm able to carry on
It's been a long, a long time coming
But I know a change gonna come, oh yes it will (Sam Cooke, "A Change Is
Gonna Come")

(下線は筆者による)

(引用 4)

シカゴのみなさん、こんばんは。

アメリカは、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら、今夜がその人たちへの答えです。建国の父たちの夢がこの時代にまだ生き続けているかを疑い、この国の民主主義の力を未だに疑う人がいるなら、今晚こそがその人たちへの答えです。

この国が見たこともないほどの大行列が今日、あちこちの学校や教会の周りに伸びていました。並んだ人たちは3時間も4時間も待っていた。人によっては生まれて初めての経験でした。今度こそは違うと信じたから、今度こそ自分たちの声が違う結果を作り出せると信じたから、だからみんな並んだのです。そしてそうやって並んだ人たちが今夜、疑り深い人たちに答えを示したのです。

古いも若きも、金持ちも貧乏人も、そろって答えました。民主党員も共和党員も、黒人も白人も、ヒスパニックもアジア人もアメリカ先住民も、ゲイもストレートも、障害者も障害のない人たちも。アメリカ人はみんなして、答えを出しました。アメリカは今夜、世界中にメッセージを発したのです。私たちはただ単に個人がバラバラに集まっている国だったこともなければ、単なる赤い州と青い州の寄せ集めだったこともないと。私たちは今も、そしてこれから先もずっと、すべての州が一致団結したアメリカ合衆国 (United States of America) なのです。

私たちは今まであまりにも長いこと、あれはできないこれはできないと言われてきました。可能性を疑うよう、シニカルに恐れを抱いて疑うように言われ続けてきました。けれども私たちは今夜、アメリカに答えをもらったおかげで、手を伸ばすことができたのです。歴史を自分たちの手に握るため。より良い日々への希望に向けて、自分たちの手で歴史を変えるために。

ここまで来るのに、ずいぶん長くかかりました。しかしこの夜、私たちが今日と言うこの日に、この選挙で、この決定的な瞬間に成し遂げたことのおかげで、アメリカに変化がやってきたのです。 (オバマ「勝利演説」)

If there is anyone out there who still doubts that America is a place where all

森 あおい：アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

things are possible; who still wonders if the dream of our founders is alive in our time; who still questions the power of our democracy, tonight is your answer.

It's the answer told by lines that stretched around schools and churches in numbers this nation has never seen; by people who waited three hours and four hours, many for the very first time in their lives, because they believed that this time must be different; that their voices could be that difference.

It's the answer spoken by young and old, rich and poor, Democrat and Republican, black, white, Hispanic, Asian, Native American, gay, straight, disabled and not disabled — Americans who sent a message to the world that we have never been just a collection of individuals or a collection of Red States and Blue States: we are, and always will be, the United States of America.

It's the answer that led those who have been told for so long by so many to be cynical, and fearful, and doubtful of what we can achieve to put their hands on the arc of history and bend it once more toward the hope of a better day.

It's been a long time coming, but tonight, because of what we did on this day, in this election, at this defining moment, change has come to America. (Obama, "Victory speech")

(下線は筆者による)

Ⅲ. ポスト・ソウル世代の台頭

1. バラク・オバマの経歴「60年代の申し子」(オバマ『合衆国再生』34)
2. ポスト・ソウル世代：公民権運動以降に生まれ育った世代(音楽で言うところの「ソウル・ミュージック」が生まれたあとの世代)

(a) 「新黒人美学」

(引用5)

「新黒人美学」のなかで、自分たちは、公民権運動の成果としての人種統合によって、白人文化と黒人文化のあいだに生まれた「文化的混血児(雑種)」であ

ると言い、「こんにち、多くの若い黒人たちは、この二つの世界のあいだに引き裂かれながらも、最後にはそこから飛び出て、自分自身の世界を築き上げている。新黒人の美学によれば、ただ自然『である』だけでいい、必ずしもどちらかの服を『着る』必要はない」と言っている。「新黒人の美学」の芸術家は、黒人に生まれたのではなく、多くの選択肢のなかから黒人であることを「選んだ」のだという。(木内 82)

(b) ポストソウルの定義

(引用 6)

「ポスト・ソウル」という言葉は、アメリカ黒人が、歴史の新しい段階に移行した1970年代半ば以降の、ねじれて、厄介で、混乱に満ちて、それでいながら、素晴らしい歳月の意味を明確にする。ポスト・ソウルとは、ソウル時代 [1960年代] の結果として生じた勝利や失敗、曖昧さを、アメリカが吸収しようと試みた時代を説明するために私が作り出した省略表現である。ポスト・ソウル時代には、アメリカ人の暮らしにおいてそれまでに例をみないほど、黒人が受け入れられた。政治的な人物、広告に登場するイメージ、ポップスター、同僚、同級生として、アフリカ出身の奴隷の子孫は、自らの存在を浸透させ、この国の残酷な歴史を考えると驚くほどまでに、対等とは言わないまでも、国民として受け入れられてきたのである。(George, *Post Soul Nation* ix)

The term “post-soul” defines the twisting, troubling, turmoil-filled, and often terrific years since the mid-seventies when black America moved into a new phase of its history. Post-soul is my shorthand to describe a time when American attempted to absorb the victories, failures, and ambiguities that resulted from the soul years. The post-soul years have witnessed an unprecedented acceptance of black people in the public life of America. As political figures, advertising images, pop stars, coworkers, and classmates, the descendants of African slaves have made their presence felt and, to a remarkable degree considering this country’s brutal history, been accepted as citizens, if not always as equals. (George, *Post Soul Nation* ix)

3. コルソン・ホワイトヘッド

(a) 作家経歴 Colson Whitehead (1969–)

森 あおい：アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

ホワイトヘッドはニューヨークのマンハッタンで生まれ育つ。白人が圧倒的多数を占め、アイヴィーリーグへの高い進学率を誇る私立校のトリニティで学び、ハーヴァード大学を卒業。「ヴィレッジヴォイス」で書評や、テレビ、音楽の批評を担当したあと、『直感者』*The Intuitionist* (1999) で作家デビュー。第二作の『ジョン・ヘンリー・デイズ』(*John Henry Days*) (2001) がピューリッツァー賞の最終候補となり、2002年には、もっとも将来性のある作家に授与されるマッカーサー財団によるフェローシップを授与され、アメリカでもっとも注目されている作家の一人である。また、ニューヨークに住み続け、アーバンポップカルチャーに関するコメンテーターでもあり、『ニューヨークタイムズ』や『ニューヨーカー』に積極的に寄稿するジャーナリストでもある。

(b) 『サグ・ハーバー』(2009)

(1) 荒筋

ホワイトヘッドの5作目となる『サグ・ハーバー』は、作者自身をモデルにした主人公ベンジーが、黒人だけの夏の避暑地、ニューヨーク州ロングアイランド東部に実在するサグ・ハーバーに母方の祖父が建てた別荘で、弟レジーと過ごした1985年の夏が時代設定となっている。

(2) 半自伝的要素

- (i) 主人公ベンジー、父は医者、母は弁護士。白人が多数を占める名門私立校で学ぶ。
- (ii) 中流階級に努力して登りつめた父親と、生まれながらにしてその特権を享受する子ども世代の格差（父親世代との価値観の違い）
- (iii) 公民権運動の黒人リーダーを知らない世代

(3) 1980年代のニューヨークでの人種差別

- (i) マイケル・スチュアート (Michael Stewart) (1958-83) : ニューヨークのブルックリン生まれのグラフィティ・アーティスト。1983年9月15日に、ニューヨーク市の地下鉄の駅の壁に、スプレーを使って絵を描いていたところ逮捕され、無防備であったにも拘わらず警察官から暴力を受けて意識不明となり、9月28日に死亡した。
- (ii) グランドマ・エレノア・バンパーズ (Grandma Eleanor Bumpers) (1918-84) : アパートの家賃を一月分滞納し、大家から通報を受けて出動した警官に強制的に追い出されそうになったため、抵抗して殺された。

(4) サグ・ハーバーのコミュニティの歴史に見る人種差別

- (i) 文学でも取り上げられる有名な町。(メルヴィルの『白鯨』やフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』等で取り上げられる。)
- (ii) 大西洋側、白人のリゾート地として発展
- (iii) 1930-40年代にかけて、大西洋側と反対側の地区にハーレムからミドルクラス黒人がやってきて黒人だけのコミュニティを形成。

IV. お わ り に

参考文献

Cooke, Sam. "Change is gonna come."

<http://www.lyricsmode.com/lyrics/s/sam_cooke/a_change_is_gonna_come.html>.

Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903. New York: Bantam, 1989.

(邦訳 W・E・B・デュボイス『黒人のたましい』木島始、鮫島重俊、黄寅秀訳 岩波文庫 1992.)

Gates, Henry Louis Jr. and Nellie Y. McKay, eds. *The Norton Anthology of African American Literature*. 2nd ed. 1997. New York: Norton, 2004.

森 あおい：アフリカ系アメリカ人の音楽・文学を通して見る人種意識

George, Nelson. *Post Soul Nation*. New York: Viking, 2004.

Marvin, Thomas F. “Preachin’ the Blues: Bessie Smith’s Secular Religion and Alice Walker’s *The Color Purple*.” *African American Review* 28-3 (1994): 411-421.

Obama, Barak. *The Audacity of Hope*. New York: Three Rivers, 2006.

(邦訳 バラク・オバマ『合衆国再生』ダイヤモンド社 2007.)

_____. “Full text: Victory Speech” BBC News Online, 5 Nov. 2008.

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/americas/us_elections_2008/7710038.stm>.

(邦訳 バラク・オバマ「勝利演説」<<http://biz8go.web.fc2.com/address/address3-1.html>>.)

Schmich, Mary. “Obama’s Sam Cooke connection.” *Chicago Tribune Online*. 16 Nov. 2008. <http://articles.chicagotribune.com/2008-11-16/news/0811150321_1_sing-songs-hair>.

Whitehead, Colson. *Sag Harbor*. Doubleday: New York, 2009.

_____. “The Year of Living Postracially.” *New York Times* 3 Nov. 2009.

<http://www.nytimes.com/2009/11/04/opinion/04whitehead.html?_r=1>.

_____. Colson Whitehead HP.

<<http://www.colsonwhitehead.com/Home/Home.html>>

ウエルズ恵子「アメリカ黒人霊歌」『立命館大学言語文化研究』17.1 (2005): 171-91.

木内徹「ポスト・ソウル美学—アフリカン・アメリカン文学・文化の新風」『水声通信』29号 2009年3／4合併号. 80-85.